

自然共生型住宅団地の自然計画環境に対する居住者の選好と利用に関する研究

正会員
同○Lee, Hyun Jung*
大野 隆造**自然環境計画
認知集合住宅
選好場所性
利用

1. 研究の背景と目的

自然環境計画は、最近 10 年ほどの間に集合住宅地開発において注目され、地球環境問題や Well-Being と同じくらい重要になってきている。本研究は、多様な自然の要素や形態を利用した自然環境計画が行かれた都市近郊の集合住宅において計画された「自然環境」の住民による認知や選好と利用の実態を明らかにする。

Min&Lee (2006) は集合住宅の外部空間利用に関する研究で住民が好む空間と主に利用する空間が互いに一致することを明らかにし、‘場所 (place) = 選好空間 = 利用空間’のモデルを検証した。しかし計画された自然環境はよく利用される空間ではなく、その原因は住民の要求、人間の日常的な行為パターン、および行動領域に対する理解不足などである (Lee et al., 2008)。Rapaport (2005) によれば人々は住居環境内に多様な意味と価値を与え、‘生活世界’を経験し各自の基準(個人的、文化的など)によって環境を評価する。そして、認知を通じて意味と価値を捜して、それに対する選好度で空間を選択して使う。日常生活で使われる環境はより重要な環境と評価されたと言える。また人間は環境を評価する時に一つ一つの要素で評価をするのではなく全体的な状況を通じて空間を評価する(大野, 2001)。

自然環境が‘場所’として好まれ、よく利用されるためには心理的な選好空間と利用空間を一致させなければならない。本研究では集合住宅の外部空間の中で好まれる空間、利用される空間の関係を明らかにし、このような空間の環境的特性(要素および状況)を把握する。

2. 調査の方法

団地内に計画された各種の自然環境に対する住民の選好や利用について、アンケートおよびインタビューにより調査した。調査対象地は自然要素を多く取り入れた計画で、2004 年建設されたソウル近郊の住宅団地(セチョンニョングリンビル)である。調査は分譲住戸がある第4および第5団地の外部空間を利用する主婦(62 人)を対象にした。アンケートは団地内に計画された自然環境を 29 の地区に分け(図1)それぞれの地区で‘よく知っている(認知)’、‘好き(選好)’、‘利用する(利用)’所をあげてもらった。アンケートであげられた地区に対しては選好理由、利用行動、利用する理由に対して追加的なインタビューを実施した。

3. 研究の結果

3-1. 住民の特性による選択傾向

外部空間を利用する主婦は平均 17 個の空間を認知し、7 個の空間を好み、8 個の空間を利用している。その中で、

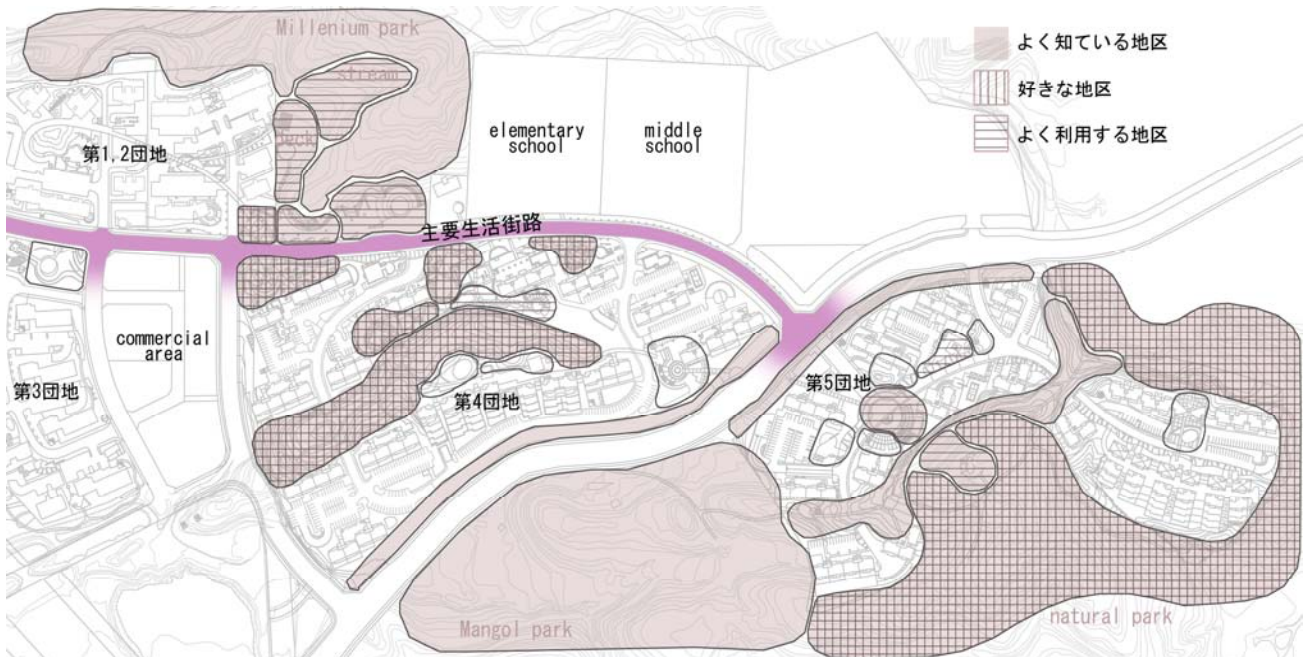


図1 セチョンニョンググリンビル 配置図と認知、選好、利用地区

What is the preferred and well-used natural environment to resident in environment-friendly housing complex?

Lee Hyun Jung, OHNO Ryuzo

外部空間に対する選好度や利用度が高いのは末子の年齢が乳児(7才以下)、年齢帯別では30代の主婦であった。

3-2. 居住地による選択傾向

表1に示すように住民の大部分は自分の団地の空間はほとんど認知している。しかし選好と利用は Rapaport や場所理論が指摘しているように選択的である。住民は選好、利用において他団地や外部共用空間よりは自分の団地や空間を優先的に選択した。これは住民が自分の居住団地を生活空間領域の基本単位として明確な領域性を持っているからだと判断される。しかし主要生活街路直結している施設の場合には選好や利用度が高く見える。

表1 地区別 平均 認知、選好、利用地区数					
住民		第4 団地 地区 [9]	共用 地区	第5 団地 地区 [9]	total
第4 団地 住民	認知	7.3	7.7	3.0	18.0
	選好	3.7	2.2	0.0	5.9
	利用	4.4	2.5	0.6	7.5
第5 団地 住民	認知	2.5	5.5	7.1	15.1
	選好	1.1	1.2	2.3	4.6
	利用	1.5	1.4	2.9	5.8

団地別では第4団地の場合が第5団地より認知、選好、使用で主婦の選択した地区の平均数が高く現われた。第4団地の立地は中心商業施設に面し、主要生活街路と接している。これに反して第5団地は中心商業施設から約500メートル離れていて主要生活街路の端に位置している。第4団地は外部共用施設に対して開放的に計画され、一方第5団地は独立的に計画されている。この立地的な位置が影響したと考えられる。

3-3. 選好と利用の関係

図2は各住居によって示された好まれでる地区と利用されている地区の数を示しでる。これから利用される外部空間が増せば、それだけ好まれる外部空間が増えると言える。選好空間に比べて、利用空間の方が多く利用空間に選好空間が含まれる場合が60%である。図3は各地区が好まれる地区として選ばれた回数と利用される地区として選ばれた回数によりプロットし、4タイプで分けしたものである。タイプ1は住民が好んでよく利用する

空間、タイプ2はよく利用するが好まれていない空間、タイプ3は好まれるが利用は低い空間、タイプ4は選好と利用がともに低い空間である。

3-4. 各タイプの特徴

タイプ1の空間は、自然的性格が強調されたエコロジカルな体験が可能な自然公園と主要生活道路と接して日常生活で使われる空間であり、ともに住まいと完全に分離されないで主要共用空間とも接して接近が容易である。タイプ2は遊び場や休憩施設などと一緒に計画されて住民の利便性の要求を満足させている。タイプ3は住居棟周辺の造景空間で直接的に利用することができない空間である。タイプ4の空間は主要生活領域と分離して接近が不利である場合や団地内部に計画されていても直接的な利用することができない。

表2 タイプ別の特徴			
タイプ	自然要素	位置的特徴	要素利用行動
タイプ1	自然的	樹木、草むら 居住団地のまわり 主要生活街路と分離	物理的な性質 利用
	人工的	水 居住団地のまわり 主要生活街路と連結	要素の 直接的な利用
タイプ2	自然的	樹木、草むら 居住団地の外部 主要生活街路と連結	物理的な性質 利用
	人工的	造園、水 居住団地の内部 主要生活街路と連結	要素の 直接的な利用
タイプ3	人工的	樹木、造園 居住団地の内部 主要生活街路と分離	背景としての 間接的な利用
タイプ4	自然的	樹木、草むら 居住団地の外部 主要生活街路と分離	物理的な性質 利用
	人工的	樹木、造園 居住団地の内部 主要生活街路と分離	背景としての 間接的な利用

4. 結論

住民は自分の生活空間に対する領域性を明確に持っている。したがって、日常の生活範囲の中に適切な自然空間を計画するのが重要である。計画された自然環境に対する選好と利用は互いに密接な関係を持っている。その関係によって4タイプの空間で分けることができる。それらの差異は環境を構成する自然要素、接近性、空間の連結性などの物理的な特性で説明できる。

参考文献

1. Byungho Min, Jongmin Lee: Children's neighborhood place as a psychological and behavioral domain, Journal of Environmental Psychology, 26(1), 51-71, 2006
2. Ryuzo Ohno: A Hypothetical Model of Environmental Perception, theoretical Perspectives in environment-Behavior research (Wapner et al.), Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York, 149-156, 2000
3. Hyunjung Lee, Byungho Min, Ryuzo Ohno: IS NATURE EVER USED HERE?, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, on proceeding.

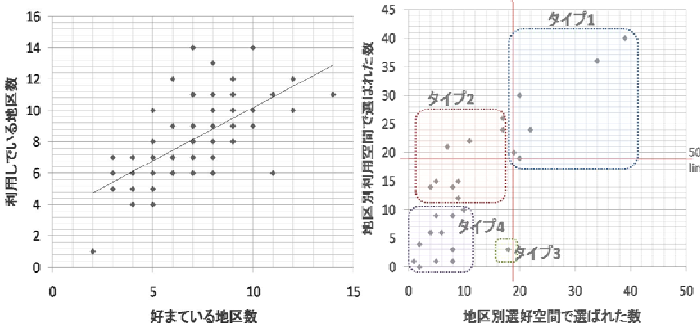


図2 住居別選好と利用の関係 図3 地区別選好と利用の関係

*東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期過程
**東京工業大学大学院総合理工学研究科教授

*Graduated student(Ph.D), Tokyo Institute of Technology
**Professor, Tokyo Institute of Technology